認知症災害時支援モデル事業実践成果報告【弥富市】
【モデル事業名】（近隣の高齢者施設と協力した避難方法の確立）

1．自治体情報（2023 年 1 月 31 日現在）	
（1）人口	43,831 人
（2）高齢者人口	11,458 人
（3）高齢化率	26.1％
（4）面積	48.28km^2
（5）日常生活圏域	３圏域
（6）地域包括支援センター数	１か所

2．事業の背景・目的

＜背景＞

〇弥富市の特徴として、東西が約９km、南北が約 15km と南北に長い地域で、海抜 0m 地帯が広がっている極めて平坦な地形である。
また、県の「津波災害警戒区域」の指定を受けており、津波による浸水などの水害とは密接な関係にあり、地形的に一旦浸水すると水が抜けにくい特徴がある。

〇モデル事業を実施する施設（以下「施設」という。）がある地域の周囲は畑に囲まれた環境で、同一法人が運営する認知症共同生活介護サービスと認知症対応型通所介護のサービスを同一施設内にある２施設で提供している。

〇各入所者 18 名が２施設と通所介護利用者 12 名の最大で計 48 名が施設で過ごすことが想定され、施設職員（以下「職員」という。）の人員基準を満たした状態であっても利用者全員の避難誘導は難しく、避難方法を確立する必要があった。

◀施設周辺の様子

施設所在地▶

＜目的＞

〇施設の構造は平屋のため、垂直避難をすることができない。

〇しかし、施設から 1.1km 離れた場所には、４階建ての特別養護老人ホーム（以下、「近隣施設」という。）や県立高等学校があるため、職員や生徒、近隣住民の協力のもと入居者及び利用者 48 名の安全な避難誘導が行えるような防災マニュアルの作成を行うこととした。

・1 年目：防災講師による防災研修、施設内で起こりうる課題の洗い出し
・2 年目：施設の防災マニュアルの作成、防災訓練の実施、防災マニュアルの完成

◀当初想定した避難経路
入居者や通所介護利用者の多くは、車椅子を利用しており、その方たちでも通ることができるような道路を選択

3．事業内容

＜2021 年度＞

〇4 月

・防災講師による施設周辺の状況確認

〇5 月

・「認知症高齢者の災害支援に関する講演会」（講師：愛知県立大学　清水宣明教授）を施設及び市防災課、市内にある他の施設も対象に開催。当初は集合型での研修開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインで開催した。（市内社会福祉施設に向けて配布したチラシは別添「参考資料 1」参照）
・参加者：市役所からは防災課長始め 5 名、地域包括支援センター始め 10 施設

〇7 月

・近隣にある県立高校環境防災コースの 2、3 年生を対象に以下の 2 つの講義を実施。
＊「災害弱者の命を守る対策の考え方」　講師：愛知県立大学　清水　宣明教授
＊「グループホームとは」　講師：グループホーム森津の里　墨　厚志ホーム長
・県立高校の教員と学生ともに、近隣に「グループホーム」という施設があることを認識していなかった。
・災害弱者になる認知症高齢者の特徴などを勉強する機会になった。

・防災研修講師から以下について指摘を受け、当初想定した避難計画を見直した。
＊当初、避難場所として計画していた近隣施設までは 1.1km 以上あり、避難経路上に緊急避難できる建物はなく、土地の特徴として、高度の液状化が想定される。また、入居者の身体的状況として車椅子を利用している方も多く、最大 48 名の対象者を避難誘導するのは難しい。
＊自力で歩行できる方も高齢者の筋力から想定すると、100mを移動するのが限界である。

＊近隣住民や近隣施設の方と協力体制を構築しても、協力を依頼した人が施設までたどり着くのは難しい。

＊高等学校も被災した場合、教員や生徒自身も帰宅困難者となり、学校で避難生活を送る可能性もある。

・地域の特徴として、津波等で建物が倒壊する可能性は低く、避難する選択ではなく**施設にとどまり「命をつなぐための防災計画」に方向性を変更した。**

〇10 月

・防災研修講師による職員を対象とした「災害弱者の命を守る対策の考え方」について講義を実施した。

・ドタバタストーリー※の作成について説明を行った。

・講義を受け、施設で発災した際に何が起こるかを職員で考えてもらった。

・また、通常業務の中でも、職員各自で災害時に想定される出来事を書き留めてもらうように説明した。

※ドタバタストーリーとは、災害時に起こりうる小さな出来事の集まりのこと。

〇11 月

・県立高等学校から災害時の協力体制を結ぶことは難しいが、何か違う形で協力していきたいとのことであったため、災害時に近隣施設との協力が必要になる場合を想定し、施設から近隣施設までの道のりを生徒が実際に歩いてみて、経路の途中で危険箇所や一時避難できる場所がないかを検証し、Google マイマップを作成した。

▲移動経路の検証の様子

＜2022 年度＞

〇5 月

・ドタバタストーリーに「避難先からエスケープされてしまう」とあったため、「どこシル伝言板※」の導入を検討。初期導入説明会を開催した。

※「どこシル伝言板」とは、QR コードを活用した情報共有サービスのことで、クラウド上にあらかじめ情報を登録しておき、その情報が入った QR コードを衣類等に貼り付けておく。行方不明になった場合に、発見者が衣類等に貼ってある QR コードを読

み取ることで、あらかじめ登録されている連絡先等へ瞬時に発見通知メールが届く仕組みになっており、位置情報も共有できる。
また、事前に登録できる内容として、既往歴や身体的特徴、注意すべきことなどがあり、高齢者が入所施設で支援が難しい場合に、一時避難した際のカルテ等を持参することなく入居者の情報共有ツールとして活用することができる。

▲「どこシル伝言板」について

○6 月

・2021 年度から取り組んでいたドタバタストーリー、施設職員同士や管理者との話し合いにより、計 48 個挙がった。
・これらをもとにドタバタまとりっくす※を作成する。

※ドタバタまとりっくすとは、ドタバタストーリーを対象（入居者、職員、もの）や時系列（発災時、避難移動、落ち着き）ごとに整理した表のこと。

・ドタバタストーリーの一部抜粋
＊外部との連絡がとれなくなってしまう。
＊通所介護利用者も施設に泊まる事になり、職員の負担が増えてしまう。
＊負傷者、死者が出てしまい、現場が混乱する。
＊利用者が混乱し、転倒するリスクがある。
＊断水してトイレが流せない。
＊転倒後の治療が困難。
＊避難先からエスケープされてしまう。
＊感染症が蔓延してしまう。
＊連絡網が機能しない
＊職員の応援が来ない。　等

施設で作成されたドタバタまとりっくす▲

・アクションカード※の作成
＊48 個のドタバタストーリーをもとにアクションカードの作成について説明した。

※アクションカードとは、ドタバタまとりっくすで整理したイベントごとへの具体的な対応を記入したもの。

・断水した際の入居者や職員のトイレについての課題があり、市防災課に相談し、何度も洗って使える組み立て式の簡易トイレを購入。購入した簡易トイレなどの防災グッズを取り扱う地元の企業（以下、「協力企業」という。）の希望により本事業へ参画することとなった。

・以降、簡易トイレの組立講習や、ドタバタまとりっくすにある「もの」の部分について協力企業側から助言や提案を受けながら、事業を進めることができた。

協力業者による簡易トイレの説明及び組立講習の様子▶

▲アクションカード作成の様子

〇９月

・近隣施設への避難を行わない選択をしたため、アクションカードの作成と合わせて、施設にある防災グッズの確認や、防災講師による防災グッズの説明を受けた。

・また、協力企業から施設で使える防災グッズの提案を受けた。

〇11 月

・アクションカードをもとに事前準備カード※を作成した。

※事前準備カードとは、ドタバタストーリーの内容を解決するために事前に準備しておくべき内容やものを記入したもの。

・地域で開催した「防災ワークショップ」に参加し、各地区防災会の方と顔合わせをするとともに、地域の避難所（一般市民が利用する）で避難所設営についての研修に一緒に参加した。

避難所設営訓練の様子▶

〇12 月

・アクションカードの見直しや、防災講師による職員からの質問対応を行う。

・発災後、施設で過ごすためのポイントとして防災講師から以下について話があった。

＊普段の生活を送れるようにする。　＊環境を変えない方法を考える。

＊ゆっくり笑顔で行動する。　＊体温を下げない工夫をする。

〇2 月

・防災訓練前の事前打合せ

＊防災訓練実施に向けて、市役所担当者、管理者と打合せを行った。

・防災訓練実施

＊アクションカードを確認しながら、簡易トイレと非常食の準備を行った。

（避難訓練の想定については、別添「参考資料 2」参照）

◀簡易トイレ組立訓練の様子

非常食を準備する様子▶

・「どこシル伝言板」QR コード模擬訓練

＊実際にエスケープした入居者がいた場合を想定して、職員自身のスマートフォンで QR コードを実際に読み込んでもらい、どのようにメールが届くかなどを体験してもらった。

＊また、以下のような内容について、事前に登録する情報を職員で決めておく。

◎内服薬　◎既往歴

◎注意すべき内容についてどこまで詳細に記入するか

模擬訓練の様子▶

４．事業を進めていく上での工夫・配慮
○事業１年目は、施設での新型コロナウイルス感染拡大防止対策により、入居者の家族についても面会を規制していたため、外部機関が施設に入ることが難しかった。 ○職員には、本事業の実施にあたって、たくさん協力をしていただいたが、日々の通常業務に加え、感染予防対策や職員の人員不足などでドタバタストーリーの作成が思うように進まなかった。このような中、たくさんの事例を解決するのではなく、日常的に起こりうる可能性が高いドタバタストーリーに限定して、防災マニュアルの作成を行っていった。 ○浸水状況や支援物資の受取方法など施設側から市への質問に対して、担当課では回答できない内容が多くあったため、市防災担当者と連携して事業行った。 ○２年間を通して研修の日程調整、アクションカードや事前確認シートの作成について、管理者に負荷が多くかかったため、声掛けを忘れないようにした。 ○職員から「災害時、市役所が何を行ってくれるのか」など公助の力を期待する声が多くあったが、まずは自助で行える方法を考えていくように説明した。 ○地元企業の協力を得られたため、施設側では解決できない「もの」についての課題などは協力企業側からのアドバイスを取り入れるように事業を進めた。 ○職員は、入居者をつれて避難所に行けば支援の手が受けられるとの考えがあったため、地域の防災ワークショップ「避難所設営について」に参加してもらい、地域の避難所の実際を目で見てもらい、入居者が実際に避難生活を送っていけるのかを確認してもらった。 ○避難生活を想定する中で、入居者の死亡時の対応について考える機会になった。

５．事業を通して見えてきた効果・課題
＜効果＞ ○職員が災害時について考えるきっかけになった。 ○防災マニュアルや備蓄品等を施設において準備していたが、職員が全く把握していないことを管理者が認識する機会になった。 ○近隣施設や地区防災会の方、地元企業と施設がつながるきっかけになった。 ○県立高等学校と災害時の連携体制についての協定を結ぶには至らなかったが、県立高校の教員や生徒に施設の存在や災害弱者の支援について認識してもらうことができた。 ＜課題＞ ○施設の通常業務がある中、すべての職員が事業に参加できることが難しく、施設内での情報共有ができているのか把握しにくい。 ○防災グッズの購入や蓄電池など、費用面から準備することが難しい物もあった。 ○最大 48 名の入居者を避難させる方法について、想定以上の災害が発生した場合も今後検討していく必要がある。

６．今後の展望
○今回検討したドタバタストーリーのみではなく、通常業務の中で新たに起こるドタバタストーリーをアクションカードに落とし込み、防災マニュアルを更新していく。 ○管理者や職員の協力を得ながら、市内の他の施設に向けたアドバイザーとして活動してもらえるような体制づくりを構築していく。

＜参考資料１＞

認知症高齢者の災害時支援に関する講演会

愛知県では、「あいちオレンジタウン構想第２期アクションプラン」に基づき、認知症高齢者の災害時支援体制の構築を進めるため、愛知県立大学と協定を締結しました。

これにより、令和３年度より『認知症高齢者の災害時支援モデル事業』として弥富市で２施設を対象に実施していきます。

各施設で防災計画の作成が義務づけられている中、今の防災計画を見直す機会とし、ぜひともご参加ください。

内　容　～「災害弱者の避難の考え方」～

日　時　５月７日（金）　午前１０時から

会　場　市役所　３階　大会議室Ｃ・Ｄ

講　師　清水　亘明　教授（看護学部）

感染症や防災に関して研究されており、保育園での災害モデル事業などに協力されています。

※同日・同時間帯に WEB（ZOOM）での聴講も可能です。
下記の IP アドレスよりご参加ください。

・ミーティング：922 9408 4893　・パスコード 478241

問い合わせ先：弥富市役所　介護高齢課　0567-65-1111
（内線 175）

【近隣施設との協力】

○ 共通

令和５年２月 21 日（火）１６時００分に、渥美半島沖約１５０ｋｍを震源とする南海トラフに絡む東南海地震が突発的に発生、地震の規模はマグニチュード９．０で、震源深は約３０ｋｍ、各地の震度は弥富市震度７と観測、また、大きな海底の地殻変動で津波が発生、伊勢湾・三河湾に大津波警報が発令

○ グループホーム森津【鳥ケ地地区】

突発的地震発生、地震の規模がマグニチュード９．０と大きく、揺れの時間が長かったことにより、地区内液状化による浸水が進み、併せて 16 時時点で津波による浸水も始まって地区内で低い位置にある田畑が浸水、道路は液状化により凸凹になってはいるが、浸水は免れている。

・避難想定

液状化がみられる為、３６名の入居者の避難は行わず。

入居者全員の無事が確認できたが、液状化の影響の為水道が断水している。

排せつの準備の為、職員用及び、入居者用の簡易トイレの準備を行い

また夕食の準備のため、玄関にて入居者の夕食の準備を行う。

○当日の進行表

・１６時３０分

施設従事者に向けて本日の訓練の説明

【従事者参加者】ホーム長、グループホーム森津及びグループホーム森津の里リーダー、森津、森津の里スタッフ数名

・１６時４０分：発災

施設全体に大きな揺れを感じたため、スタッフ、入居者ともにシェイクアウトの姿勢をとる。

＜ホーム長＞

①揺れが収まったのを確認し、ＬＩＮＥ電話を使い、両施設の各ユニットリーダーに向けて入居者及び建物の倒壊状況を確認するように指示。

②屋外の被災状況確認

＜各ユニットリーダー＞

③入居者の安否確認実施

＜施設スタッフＳ＞
④建物全体の倒壊状況の確認
ライフラインの使用状況を確認
＜ホーム長＞
⑥施設の災害状況を施設スタッフＳ及び各ユニットリーダーより入居者の状態、建物の倒壊状況の報告受ける
・施設スタッフＳ：「電気、水道のライフラインが使用できません」
・各リーダー：「入居者９名、スタッフ〇名無事です、施設内の倒壊なし」
⑦施設管理者及びホーム長にて屋外の被災状況及び建物の倒壊状況から、福祉避難所への避難は行わず、各施設にて避難生活を継続していく判断する。
⑧簡易トイレの設置及びランタンの設置を施設スタッフＳに指示を出す。

＜施設スタッフＳ＞
⑨アクションカードを見ながらランタンの設置、簡易トイレの準備を行う
⑩設置終了後ホーム長へ報告

＜各ユニットリーダー＞
⑪各備蓄倉庫より、コンロ、ボンベ、水、鍋、非常食、紙皿の準備をする。
⑫準備終了後ホーム長へ報告

＜訓練参加者全員＞
⑬カセットコンロにて湯を沸かす
⑭湯が沸いたら用意した非常食に湯を入れる
⑮完成したら食器にとりわけ試食を行う
※訓練参加者で非常食を食べてみて湯量を工夫し入居者の状況に合わせた柔らかさ等も確認していく。

１７時１５分
訓練終了